

## 《資料紹介》 金閣寺出土の「防火砂弾」

高橋 潔

2003年、特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園<sup>(1)</sup>、つまり金閣寺境内の東寄りの地域で高電圧ケーブルの埋設工事と排水路改修工事が計画された。それらの工事経路につき、事前の発掘調査を8月から10月の2ヶ月間おこなった。金閣寺境内遺跡における第10次調査にあたる<sup>(2)</sup>。この調査において、太平洋戦争中に製作されたと考えられる「防火砂弾」が現代のゴミ処理穴、いわゆる攪乱から出土した。報告書には掲載することができなかつたので、資料紹介の形で本紀要に掲載しておこうと思う。

「防火砂弾」とは消火器の代用品として作られた陶製のもので、火中に投げ入れて容器を破裂させると内部に入れた砂が飛散して消火するものであるという。同様に丸いガラス容器に液体を入れたものも生産されたという。1938年4月公布された国家総動員法に則り、軍事優先のための経済統制が進められ、金属回収とともに家庭用品を中心とした銅製品・鋳鉄製品製造禁止が通告された。これに対して、木製や陶製の代用品が製作された。代用品は家庭用品に限らず、手榴弾や地雷などの兵器についても製作された。防火砂弾もその中の一つとして製作されたようで、何種類かが知られている<sup>(3)</sup>。

この調査で出土した防火砂弾は欠けることなく完形であった。八角形の円筒状の形態のもので、高さ17.4cm、最大径は13.0cmある。上面は径8.0cm、底面は径8.4cmの平坦面をなしており、胴部からは上下にすぼまった形状で、断面形は縦方向に扁平な八角形を呈する。胴部と底部は型作りによって作られており、器面外面には離れ砂の痕跡が明瞭である。すぼまっている上部は粘土紐が積み上げられており、外面に粘土紐の痕跡がのこる。上面は径6.0cmの円形の凹みが造り出され、中央には径4.0cmの円形の口が開けられている。蓋あるいは栓のようなものがあつたと思われるが、出土しなかつた。底部は中央が径7.0cmの円形に凹んでいる。胎土は涼炉などのものと共通するいわゆる「白土」といわれるもので、器壁の厚さは2mm程度である。胴部に八面ある幅5.4cm、高さ11.2cmの各面のうち、正面の3面には文字と模様が浮き彫りされている。正面には長方形に区切られた内部の上方に爆撃機のイラストが配され、その下にはさらに四角く囲った中に「砂弾」と書かれている。正面の左右の面には落下する爆弾を意匠化したと見られる囲みの中に、右面には「敵は米英だ」、左面には「油断は禁物」という戦時標語が書かれる。また、正面の対面、裏面の左下には窯印と見られる記号と「特製」の文字が陰刻されている。

1942（昭和十七）年に始まった米軍による本土空襲は、1944（昭和十九）年サイパン島が占領されてからは東京・大阪など主要都市がその対象とされ、頻繁な爆撃が行われた。このころには国民の間にも厭戦感が蔓延し出したため、政府では米英に対する敵愾心を喚起する「鬼畜米英」などのスローガンが用いられた。出土品の意匠や戦時標語を見れば、このころに製作されたものと考えられる。京都・奈良は古都として、ほとんど空襲は受けなかったという。金閣寺で出土した本品は、金閣寺のいずれかの場所に戦時中に備えられていたが、結局使われることなく廃棄されたものであろう。



出土した防火砂弾

#### 註釈

- (1) 金閣寺は舍利殿・金閣が有名であるため通称されるが、正式には足利義満の菩提寺としてその法号に因んで「鹿苑寺」という。また、遺跡名は1925（大正14）年国の特別史跡・特別名勝に指定されたことによっている。1994（平成6）年には「古都京都の文化財」の一つとしてユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録されている。
- (2) 高橋 潔『特別史跡・特別名勝 鹿苑寺（金閣寺）庭園』（京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-6）2003年12月、（財）京都市埋蔵文化財研究所。
- (3) 山下峰司編『〈代用品〉としてのやきもの』2001年8月、瀬戸市歴史民俗資料館。